

ジェロントロジー

gerontology

横浜国立大学
安藤研究室

ジェロントロジー（老年学）とは、高齢者の生活にかかわる問題を解明し、より良い高齢社会をデザインする科学です。安藤研究室では、社会老年学、高齢者心理学、人と動物の関係学を中心に研究をしています。



家族などのケアを行っている「ヤングケアラー」

横浜国立大学・教授
安藤孝敏
あんどう たかとし



●「少なくとも「ヤングケアラー」

近年、家族などのケアを行っている子どもたち、「ヤングケアラー」の存在が目されるようになってきました。この言葉はまだ一般的ではないかもしれませんが、家庭内で家族などのケアを担っている若年者は少なくないようです。

総務省の「平成29年就業構造基本調査」によると、家族の介護をしている人のうち15〜29歳の若者は21万1000人でした。平成24年の前回調査では17万7600人であったので、3万人ほど増加したことになります。社会経済情勢の変化や家族の状況から考えると、ヤングケアラーは今後も増加する傾向にあると思われるます。

●「ヤングケアラー」とは？

ヤングケアラー支援の先進国であるイギリスにおける複数の定義から、三富は年齢、介護責任、介護の影響、介護の場所の4つの要件を抽出し、「疾病や障害を持つ近親者のために家で介護を担うこ

とから、その生活をなんらかの形で制限された18歳以下の若者」とヤングケアラーを定義しています。日本で初めてヤングケアラーの体系的な調査を行った一般社団法人日本ケアラー連盟のヤングケアラープロジェクトでは、「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子ども」というヤングケアラーの定義を示しています。

また、このプロジェクトでは、18歳未満のおむね30歳代までのケアラーをヤングケアラーとは別に「若者ケアラー」として年齢の範囲を広げてとらえています。

●「ヤングケアラー」が直面する問題点

三富は家族などのケアを行う子どもたちが直面する問題点を次のように整理し

ています。子どもが親のケアを担う時、その立場が逆転し、両者の関係に影響がみられる「親子関係逆転の問題」が出現します。次に、ケアを理由にした学校への遅刻や欠席、学業の遅れなどの「教育上の問題」があります。ケアによる時間的な拘束から交友範囲が狭くなるなどの「社会生活・友人関係の問題」もあります。親が要介護者であれば、家計にかかわる「経済的な問題」が生じます。「人格形成の問題」として、ケアを行うことによる子どもの情緒的な側面への影響があります。また、ケアによって自身の将来について見通しを立てられず、「就職の問題」を抱えることも多いようです。

渋谷は、家庭環境は多様であり、個々の状況を踏まえて、支援する必要があると述べています。ヤングケアラー本人だけでなく、被介護者を含む家族全体を考えた支援が重要になります。

- 1 総務省統計局(2017)『平成29年就業構造基本調査』<http://www.stat.go.jp/data/shugyou/2017/index.html>
- 2 総務省統計局(2012)『平成24年就業構造基本調査』<http://www.stat.go.jp/data/shugyou/2012/index.html>
- 3 三富紀敏(2000)『イギリスの在宅介護者』ミネルヴァ書局
- 4 一般社団法人日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクト <https://youngcarer.jp/index.html>
- 5 渋谷智子(2017)『ヤングケアラーを支える法律―イギリスにおける展開と日本での応用可能性』『成蹊大学文学部紀要』55(1)21

高齢者の自己決定

高齢者の思いを大切にしたい生活が
継続されることを目指して――

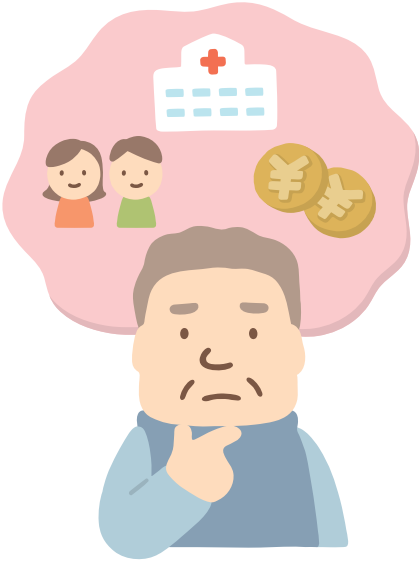
横浜国立大学大学院環境情報学府
博士課程後期

藤原ヨシ子

ふじわら・よしこ

●地域包括ケアシステムが 目指す姿

日本の65歳以上の高齢者人口は3445.9万人、総人口に占める割合（高齢化率）は27.3%、65歳以上で要介護又は要支援の認定を受けている人は591.8万人、認知症高齢者数は46.2万人、今日本は超高齢社会といわれています。2025年が構築の目途とされている地域包括ケ



アシステムの目的に高齢者の尊厳の保持があり、地域包括ケア研究会の平成26年3月の報告書²では、地域包括ケアシステムの構成要素の具体的な姿の中に、自己決定に対する支援があります。さらに、平成29年3月の同研究会の報告書³では、2040年に向けて地域包括ケアシステムが目指している最終目的は、あくまでも本人の（表出しない潜在的なものを含む）意思に基づく生活への支援であるとされています。

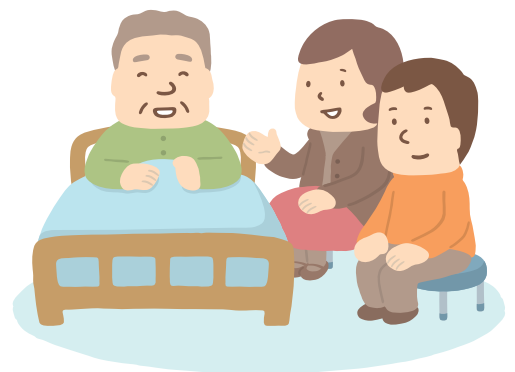
●高齢者の意思・自己決定について 考えられがちなこと

自己決定に対する支援は、社会福祉領域、とりわけソーシャルワークの領域では古くから重要な価値理念とされてきましたし、医療分野でも、医療を受ける者の自己決定権の尊重が掲げられています。それは、高齢者に限定したことはありません。宮前⁴は、これまで認知症の方たちが表明する意思は排除されてきた現実があるとしています。認知症の人だけではなく、すべての高齢者にとって自身のことを考え、その考えを何らかの

形で表明でき、そして、表明した考え（意思）を尊重されて生活を続けることはとても大切なことです。しかし、同時にそれはとても難しいことでもあります。高齢期を迎えても就労や社会参加をしている人たちが多くなり、多様な高齢者像が語られる今日ですが、認知症の人に限らず高齢者は自己決定できない、または自己決定する力が弱い存在、あるいは、高齢者の意思表示の内容には現実的でない判断が含まれているという誤った考えを持たれることがあります。そして、そのため周囲の人が高齢者に代わって適切な判断をすることがよいと考えられがちです。ただ、その時に、高齢者の長年培ってきた思いやその時々⁵の考え（意思）が尊重された判断や決定、支援がなされているでしょうか。

●多様な高齢者の思いを 大切にしたい支援を

- 1 内閣府（2017）『平成29年版高齢社会白書』
- 2 三菱UFJリサーチ&コンサルティング（2014）『地域包括ケアシステムを構築するための制度論等に関する調査研究事業報告書』http://www.nurc.jp/uploads/2014/05/koukal_140513_c8.pdf
- 3 三菱UFJリサーチ&コンサルティング（2017）『地域包括ケアシステム構築に向けた制度及びサービスのあり方に関する研究事業報告書―2040年に向けた挑戦』http://www.nurc.jp/sp/1509/houkatsu/houkatsu_01h28_01.pdf
- 4 宮前史子（2017）『認知症とともに生きる人々の声から始めよう』『老年学』コミュニケーション・ジャーナル・シエロントロシー No. 04
- 5 石川時子（2011）『ソーシャルワークにおける自己決定原理の考察―自律・自己決定の「価値」をめぐって』『社会福祉研究』52, 111-122



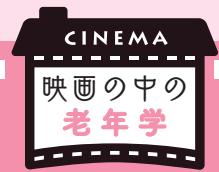
とや軽視されることのないように、私たちは、多様な高齢者の姿や思いを基に、ご本人とともに意思に基づく生活への支援のあり方をあらためて考えていくことが必要でしょう。

■「ひとりぼっちの老後は不幸？」

日本では、65歳以上の方がいる世帯のうち、26.3%がひとり暮らしをしています。この数は、今後も増加していくと予測されています。そんな中、孤独死や孤立死と呼ばれる最期が取り上げられることもしばしば。ひとり暮らしへの不安が生じるのも不思議ではありません。そこで今回は、妻に先立たれ、職も失い、生きる希望を失った偏屈で孤独な男性とその周囲の人々との交流を描いた、スウェーデンの物語をご紹介します。

■『幸せなひとりぼっち』

オーヴェ（ロルフ・ラッスゴード）は、妻に先立たれたひとり暮らしの男性。ルールやマナーに過度にうるさく、何かと怒鳴り散らすオーヴェは、地域でも煙たがられる存在。そんな彼が望むのは、亡き妻のもとに旅立つこと。職も失い、生きる気力を無くした彼は、自宅で首を釣ろうとします。その時現れたのが、向かいに越してきたイラン人女性、パールヴァネ（バハール・パルス）とその家族たち。騒々しいパールヴァネたちに、オーヴェは自殺を邪魔されてしまいます。陽気で無邪気、そして遠慮なくご近所として接してくるパールヴァネ一家の面倒をつい見てしまっオーヴェ。偏屈な彼はまた、正直で生真面目な人でもあった



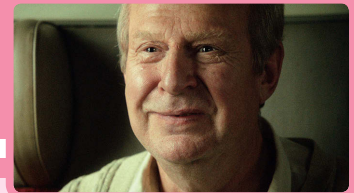
第7回

『幸せなひとりぼっち』

横浜国立大学大学院
環境情報学部・博士課程後期

木村由香

きむら・ゆか



協力：尾上正幸
〔株〕東京葬祭 取締役、
終活・エンディングノートアドバイザー／
終活映画ナビゲーター

のです。

こうして徐々に近所の人々とも打ち解けていったオーヴェは、いつしか、役人の横暴から住民を守るため、皆と団結して立ち向かっていました。そこには、ひとり暮らしではいてもひとりではない、「愛すべき地域の頑固じいじい」のオーヴェがいました。

■大切な人への手紙

オーヴェは、心臓を患っていました。自らの万が一に備え、パールヴァネに手紙を残していたオーヴェ。そこには、相手への思いやりの言葉と、いくつかの頼み事が書かれていました。自分の死後についての依頼が、まるで隣人に「ちよっとはしこを貸して」と言つかのような雰囲気でしたためられています。

ひとりぼっちなつもりでも、ふと周りを見渡してみると、さまざまな人が行き交っている事に気づきます。近隣の人々とあなたがい関係を築いたオーヴェ。そこには、パールヴァネという偉大なる他人の力があります。お互い認めあえる他人との付き合いは、自らの殻をやぶり、世界を広げてくれることがあります。終活といっても、一から十まで自分ですべて決めきってしまう必要はありません。自分と周りとの関係の中で、足りないものを補うために取り



『幸せなひとりぼっち』
発売元：アンブラグド
販売元：ポニーキャニオン
価格：DVD ¥3,800 (本体) + 税
Blu-ray ¥4,700 (本体) + 税
©Tre Vanner Produktion AB.
All rights reserved.

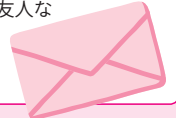
- 1 内閣府(2018)平成29年版高齢社会白書
- 1 木村由香、安藤孝敏(2015)エンディングノート作成にみる高齢者の「死の準備行動」『応用老年学』9(1)、43-54

組めばよいのです。もし頼れる人ができたら、その方へ想いを伝え、頼み事をするのもまた終活です。たとえばそこに想いを記した手紙があったとしたら、それは残された人にとってもかけがえのない宝物となるでしょう。

終活用語の基礎知識

【大切な人への手紙】

遺言書が財産についての意思を残す法的に認められた文書であるのに対し、遺書や手紙は自分の気持を伝えることを主な目的とした私的な文書です。手紙形式で残すものが一般的です。最近では、死後手紙を届けてくれるサービスや、映像を残すサービスなど、さまざまな手段が出てきています。どのような形であれ、こうしたメッセージは残された遺族や友人などが抱える悲しみを癒やす助けとなることがあります。



高齢者の性別による 余暇活動の違い

横浜国立大学大学院環境情報学府・
博士課程後期

福井弘教

ふくい・ひろのり

●自由な余暇活動

人には年齢によって仕事や勉強などの、いわば義務に近い「強いられる活動」と、自由に活動できる余暇活動があります。今回、注目したのは自由に活動できる時間が多いと考えられる高齢者の余暇活動です。高齢者といっても男性と女性では差異がありそうで、本稿では性別による余暇活動の違いに着目しました。

●性別による違い

余暇活動において、恋愛はさておき、当初は男女の区別なく遊び、小学校入学など一定年齢に達すると男女それぞれ別に遊ぶことが多くなります。以降、一般的な友人関係においては男女別の余暇活動が主流となります。

ところが、高齢者になると状況が様変わりするようです。女性グループによる余暇活動は継続されますが、男性グループによる余暇活動は減少します。これは、男性の寿命が女性と比較して短いために



単純に減少するというわけでもないようです。30、40代など、比較的早い段階から男性グループの余暇活動は減少したまま、高齢者になっていくイメージです。

高齢女性グループは至る所でみられます。ショッピング、食事、観劇、旅行など活発です。一方、高齢男性は？というところでしょうか。高齢男性のみが連れ立ってショッピング、旅行といった姿をみることはほとんどありません。

●ギャンブル場は 高齢男性憩いの場？

グループが「崩壊」し、単独行動となった高齢男性が集積する場所はどんなところがあるでしょうか。たとえば、競馬、競艇などのギャンブル場が該当します。もともと、男性は「群れるよりも単独行動を好み、ホルモンの影響で闘争心やチャレンジ精神が高くなる傾向があるためギャンブルにのめり込みやすい」という指摘もされていることから、まさに高齢男性憩いの場であるといえるでしょう。

●ジェンダーの視点から

人生には節目があり、なかでも結婚や子育てといった契機は、余暇活動を変化させる原因になると考えられます。しかし、それらをふまえても女性と男性の差が大きい気がします。

「老後に良好な夫婦関係を求める夫と逆に頼るのは健康という妻、妻にすり寄る夫と夫離れしている妻という構図」があるように、仕事をしている時は、男性が優位に立ちますが、リタイアした途端に女性が優位に立つということがいえます。これには、性別役割分業、ジェンダーが関係していると考えられます。

「男は外で仕事、女は家庭で家事・育児・介護」という固定観念が日本では定着しており、これに基づいて、年金制度などの政策や多くの社会的規範が形成されてきたといっても過言ではありません。「多くの男性は仕事価値観の中心に

あって、仕事の喪失はアイデンティティの喪失といっても過言ではない」という指摘は多くの男性にあてはまると考えられます。こうした意識を男性・女性の双方が変えていかなければ、今後も男性の高齢期の余暇活動は限定的になる可能性が高いといえるでしょう。



- 1 リサーチ・アンド・テイヘロブメント (2011) 『シニア調査』後期高齢者調査 (90歳まで対象) 趣味・娯楽・旅行について」 <https://www.rad.co.jp/wp-content/uploads/2014/09/d7b673038ae8f752b2b155429afb3fd7.pdf>
- 2 齊藤勇 (2011) 『面白いほどよくわかる！「男」がわかる心理学』西東社
- 3 沖藤典子 (1996) 『人生の午後へ男も女も今が変わるとき』労働旬報社

ジェロントロジー No. 07

2018年10月10日発行



編集・発行：
横浜国立大学 安藤研究室
「ジェロントロジー」編集部
〒240-8501
神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-2
教育学部 第3研究棟 710号室
tel & fax: 045-339-3270
e-mail: andolab.ynu@outlook.jp
homepage: <http://www.ando-lab.ynu.ac.jp/>